

ハイデルベルク信仰問答講解説教 49 「神がすべてになる」(2012年9月9日 礼拝説教)

【聖書箇所】

主よ、早く答えてください／わたしの霊は絶え入りそうです。御顔をわたしに隠さないでください。わたしはさながら墓穴に下る者です。朝にはどうか、聞かせてください／あなたの慈しみについて。あなたにわたしは依り頼みます。行くべき道を教えてください／あなたに、わたしの魂は憧れているのです。主よ、敵からわたしを助け出してください。御もとにわたしは隠れます。御旨を行うすべを教えてください。あなたはわたしの神。恵み深いあなたの霊によって／安らかな地に導いてください。(詩編143：7-10)

キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。最後の敵として、死が滅ぼされます。「神は、すべてをその足の下に服従させた」からです。すべてが服従させられたと言われるとき、すべてをキリストに服従させた方自身が、それに含まれていないことは、明らかです。すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。(Iコリント15：25-28)

【説教】

今日は、第48主日、問123のところ。ここは主の祈りの二番目の祈り「御国を来らせたまえ」について教えるところ。『御国』というのは、「神さまの国」「神さまのご支配」のことですが、主の祈りの中でこの祈りを祈る時、そこでわたしたちは何を考えているのでしょうか。神さまの国ということは何をイメージしているのか。

例えば、それは戦争のない、平和で安全な世界を考えるかもしれません。あるいは不公平のない社会、差別のない社会、そういうことを考える。そういう理想的な世界を実現させてくださいという祈りでしょうか。そうするとキリスト教の目的は、平和な世界、誰もが幸せに暮らせる社会の実現ということになります。そういう理想社会を昔から人類は追い求めてきました。資本主義社会にせよ、社会主義、共産主義社会にせよ。でも人類の歴史にそういう理想的な国は未だ実現していません。理想郷(ユートピア)という言葉は、元々、ギリシア語の造語でして、「ユー(無い) トポス(場所)」そもそもそういう場所は存在しないという意味です。だからこそ神さまに祈るのでしょうか。もう最後は神頼みということでしょうか。

ここでわたしたちが立ち止まって考えておきたいことは、そもそも『御国』というものが、わたしたちの理想とする世界のことなのかということ。神さまの国とは、わたしたち人間の憧れ、願望が満たされることなところのことなんでしょうか。なぜこういうことを問うかという、ここで間違えてしまうと聖書の信仰そのものが間違ってしまうのではないかと思うからです。というのは、聖書の信仰は、この神さまの国を目的とするものだからです。神さまの国がわたしたちの目的、目標です。言わば、神さまの国に向かって旅をする民、それがわたしたち信仰者です。その目的である神さまの国がどのようなものなのか。それを間違え、わたしたちは正しく目的地にたどり着くことができないのであります。

そこで今日の信仰問答に注目していただきたい。ここで心に留めておきたい言葉があります。「あなたがすべてのすべてとなられる御国の完成に至るまで」とあります。今日はここだけでも覚えていただければよいと思います。神さまがすべてのすべてとなられるところ、そこが神さまの国ということです。ですから先ほど言う単に人間の理想とする社会、人間の思いが満たされることではないのです。むしろ神さまがすべてになる場所。神さまで満たされること、それが神さまの国なのです。しかし神さまがすべてと言われても、それこそ現実味のない話、理想郷ではないかという批判も聞こえてきそうです。神さまがすべてになるということは、どういうことでしょうか。

この言葉の根拠となった御言葉は、Iコリントの15：28のところ。ここには「服従」という言葉が繰り返されますが、これは神さまの完全な支配ということ。すべてが神さまのもとに服する時が来る。その時には神さま以外の支配は

もはやないということです。そういう意味で神さまがすべてのすべてだということ。そしてその時とは終末、世の終わりのことであります。

しかし、今はまだその時ではありません。ですから神さまがすべてのすべてではないのです。だからこそ『御国を来らせたまえ』神さまがすべてとなってくださいと祈る必要があるのです。言うまでもなくこの地上の歩みにおいて、わたしたちは罪の支配、死の支配に捕われております。その罪とは、神さまのご支配、神さまがすべてのすべてであることを捨てて、自分の支配、自分をすべてにしようとしたことでもあります。それはあのアダムとエバの墮罪の物語にも表されていることです。そこで最初の人間は神さまとの約束を捨てて、自分がすべて、自分が神になろうとしたのです。その結果、楽園追放、神さまの国からわたしたちは追放されてしまいます。

この罪に支配されるとわたしたちはどうなるか。そこでわたしたちは自分の支配の成り立つ場所、自分の国を作ります。自分の周りが見えない線を引き。言わば、自分の「なわばり」を作るのです。当然ながら、なわばりを作れば、そのなわばりに入る者を許さないということが起こる。最近、領土問題が再燃しておりますが、まさにこれに象徴的に表されているように思います。このことでナショナリズムがあおられ、感情的に国と国が対立するようなことになりました。そしてそれは国と国だけではなく国民の中にも自分の意見以外を認めない、偏狭なナショナリズムを生み出します。最近、新聞に載っていたのですが、ある著名な作家が、テレビで領土問題のことでコメントを求められ、「そんなことはどうでもいいように思う。それよりこの問題でもっと大切な問題が放っておかれることが心配」ということを言ったら、まるで非国民呼ばわりされてひどい言葉の暴力を受けたと言います。意見の違う者を攻撃する、それは「なわばり」に入るからです。自分の主権が脅かされると思うのです。その結果、自由にものが言えない状況がこの国にも起こるのです。

この構図は、福音書においても顕著に見られます。例えば、律法学者やファリサイ派の人々の主イエスに対する憎悪とは、まさに自分たちの「なわばり」自分たちがすべてになっているところへ、主イエスが入って来られたことに始まります。主イエスが力強く教えを説き、多くのしるしを行うことを彼らはおもしろく思いません。決定的なのは、主イエスがエルサレムに入り、その神殿で宮清めをされた。それはまさに彼らの庭、彼らの主権を脅かす出来事でした。ですから、すかさず律法学者たちは主イエスのところに来て「何の権威でこのようなことをしているのか」と言います。これは自分たちの権威を脅かされたことへの強い抵抗です。そういう存在を拒絶するのです。それが結果として主イエスを十字架へと追いやることになりました。自分のなわばりを犯したからです。

わたしたちも同じような感情を持ちます。誰でも自分の意見が通り、自分がもてはやされるところが居心地がよいのです。そこへ別の意見が入ってくるとそれを排除したくなる。神さまもそこに入らせない。神さまが入ってくると都合が悪くなるからです。だから排除する。どこまでも自分が中心でありたいのです。宗教学者の橋爪大三郎という人は、ある本の中で日本人に多い無神論についてこういうことを述べている。「日本人の考える無神論は神に支配されたくないという感情。神に支配されたくないのはそこで自分の主体性を奪われると考える。だから逆に神がたくさんいる。たくさんいれば自分が主体的に神を選ぶという立場になる。主体性が発揮しやすい。」これはある意味、的をついていることだと思えます。自分が主になっていること。せめて自分の中では主でありたい。そういう意識が強いのかも知れません。「村」の意識、よそ者という考え、一見、絆、コミュニティの強さを感じますが、その反面、閉鎖的、封建的などところが強いのです。自分と人との間に見えない線を引く。だから共に生きることができない。それが国家間の問題だけではなく、人間関係の中に起こる様々な軋轢、分裂を生むのです。それは人間が神さまの国を失った結果、神さまとの間に線を引いた結果であると言わざるを得ません。

そしてそういうことは、教会の中にも起こります。ここは自分たちの教会という意識が強い。そういう意識は一方で大切ですが、しかしそれが独善的になると問題です。他から意見されたくない。介入されたくないとなると教会はだんだん健全さを失っていきます。教会でも自分たちの「ムラ」、自分たちのなわばりを作ってしまうのです。教会もまた神さまがすべてのすべてではなくなっている。そういう現実がある。

だからこそわたしたちは「御国を来らせたまえ」と祈り続けるのであります。神さまがすべてのすべてになられるためには、終末、世の終わりを待たなくてははいけません。今は、まだそうではないのです。教会もこの世にあって神さまのご支配を始めたにすぎない。教会にこそ神の国があるという考えは傲慢です。その一端は見えているかもしれない。例えばこの礼拝において、交わりにおいて、神さまの国を感じることはできるでしょう。しかし完成していないのです。だからパウロが言うように、「何とかして捕らえようと努めているのです」（フィリピ3：12）この姿勢が大切になります。

信仰問答では、この御国を求める三つの姿勢を示します。一つは「御言葉と聖霊とによって治めてください」人間の意見ではなく、神さまの言葉によって、そして御言葉からキリストの福音を説き明かす聖霊の働きによって、わたしたち正しく神さまの主権を仰ぐことができますようにということです。神さまの言葉だけがわたしたちを悔い改めに導き、御国に導くものです。そして二つ目は「教会を保ち進展させてください」教会の形成のこと。これはただ教会員が増えるということではありません。教会がキリストのからだとして、キリストを頭として健全にキリストの主権を現すようになることです。先ほども言うように、すぐにも人間の主権が頭をもたげてくるからです。そういう誘惑から解放され、教会においてキリストの主権、神さまのご支配を現すことができますようにということです。三つ目は「神さまに逆らい立つ悪魔の業やあらゆる力、邪悪な企てを滅ぼしてください」これは自分とは関係のないことではなく、自分の中にそういう神さまに逆らう業、企てが起こる。そのことを深く顧みながら、そういうことをすべて滅ぼしてくださいと祈ることです。

その上で、改めて心に留めたいことが、神さまがすべてのすべてになるということです。わたしたちはそのことを祈り求めるのですが、それはどのようにわたしたちの身に起こるのでしょうか。現実味のあることとして。主イエスの伝道の第一声は「時は満ち、神の国は近づいた」（マルコ1：15）であります。主イエスの到来が同時に神の国の到来であります。それは神さまの国がキリストの中に完全に現れていると理解してよいでしょう。ですからわたしたちはキリストなしに神さまの国を考え

たり、求めたりすることはできないということです。キリストの中に神さまの国を体験する。神さまの国を見る。それはどこまでもキリストとの結びつきであります。キリストと一つになる。以前、この主の祈りはキリストと一つになって祈ることだと申しました。主の祈りは、キリストの中へわたしたちを招く祈りです。神さまがすべてのすべてになるというのは、キリストにおいて、わたしたちがそのからだを生きることで実感することではないでしょうか。その完成はもちろん世の終わりを待たなくてはならないでしょう。しかし地上の歩みにおいても始まっている。この信仰問答が告白したように「次第次第に、いよいよ神のかたちへと新しくされていく」（問115）それが御国を求めて生きるわたしたちの具体的生活を造るのです。それがこの感謝の生活として、律法に生きること、祈りに生きること、それはキリストの中で初めて可能になることです。

「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です」（エフェソ1：23）わたしたちは洗礼を受けて、教会につながりますが、それはキリストと結ばれることです。そこでわたしたちはキリストの命を生き始めました。神さまをすべてのすべてとする歩みがそこに始まっているのです。祈りをささげましょう。